



TITLE:

# 施印というメディアー近世後期京都「孝学所」施印の流通と意味

AUTHOR(S):

ファンステンパール, ニールス

---

CITATION:

ファンステンパール, ニールス. 施印というメディアー近世後期京都「孝学所」施印の流通と意味. 書物・出版と社会変容 2019, 22: 31-63

ISSUE DATE:

2019-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/242992>

RIGHT:

発行元の許可を得て掲載しています。

## 施印というメディア

——近世後期京都「孝学所」施印の流通と意味——

### フアンステーンパール ニールス

#### はじめに

「施印<sup>せいいん</sup>」とは何か。近世文学もしくは書物文化研究に携わる者にとつては、馴染みある用語ではあるが、その正体は必ずしも明確であるとは言い難い。というのも、教化目的で無料配布された印刷物という大雑把な定義は定着しているようだが<sup>(1)</sup>、その作成・形態・内容・流通・受容などの総体は不明である。というより、それを説明しようとする試みは、乙竹岩造著『施印とポスター』という小冊子しか確認できない。教育史学者の乙竹氏は、施印を社会教化の方法として評価した上、その分類化を図り、欧米のポスターとの比較を通して、内容・用途・形

態的特質を説明しようとした意欲作であった。しかし、石門心学の施印に限定した史料制約と、日本対欧米という恣意的かつ不安定な分析軸と、そもそも十分な史料の根拠が示されていないことが相まって、現在、その研究成果を有意義に活かすことが困難である<sup>(2)</sup>。乙竹氏のほかにも、施印を取り挙げる研究は僅かながらは存在するが、そのいずれも問題意識が不明確なため、史料紹介の域を出ない<sup>(3)</sup>。言い換えれば、これらの研究は施印を検討はしているが、施印そのものを検討はしていない。

なぜ施印を体系的に検討した研究がこれだけ乏しいのか。詳細は後述するが、施印ならではの資料的特徴もあるが、それよりも学界の商業出版への執着があろう。というのは、商業出版こそが「中世」と「近代」をまたぐ

「近世」を象徴する、極めて重要な歴史的出来事であった。商業出版は、従来公家や五山僧が独占してきた秘伝かつ口伝の知を広く民衆に開放することによって、中世と異なる近世時代を可能たらしめた。また、そういった「古典」と新たな書物の知が社会に広く浸透し、共有されることにより、国民意識やパブリック圏、いわば近代の基礎が形成された<sup>(1)</sup>。

以上のような商業出版の意義について異論はないが、もしそれが「無料配布」という要素が今まで見落とされ、あるいは棚上げされた理由なのであれば、腑に落ちない。商業出版の画期性はその書物の有料性ではなく、あくまでもその開放性にある。たしかに、資本原理に基づいて成立した書肆という生産・流通システムによって、書物の知は一層広く普及できたが、それは書肆を経由しないものは普及できなかった、ということを経由しなくてもいい。実際、施印も大量かつ広範囲で流通していたので、従来の研究関心からみても、十分着目に値するはずである<sup>(2)</sup>。

しかし、施印に脚光を浴びさせたいと考えるのは、決してそういった消極的な理由ではない。実は、施印なら

では、書物史・思想史の問題としての魅力がある。まず、書物史の問題としてみると、施印の流通が着目すべきである。市販の書物の場合、その流通は書肆を軸に展開されるのだが、営利目的でない施印はどうであろう。世に届けたいメッセージを無事書物の形まで仕上げて、それをいかに読者へ届けるのか、というロジスティクスな問題を施主がクリアしなければならない。市場経済の「見えざる手」を借りられない状況のもと、施印の「価値」は誰が決めるのか、どの需要をどのように満たそうとしたのか。施印はこのような、商業出版と交錯する、もう一つの書物世界を露わにする糸口になると考える。

第二に、施印を思想的問題としてみると、それを施した人の意図が何であったのかという問いが生じる。施印というのは、私費を投じてでも世に届けたい、という熱い志が込められたメッセージである。人をこれだけ熱くさせる背景には何があったのか。世の中の何に絶望し、未来へどのような希望を抱いたのか。そして、そのメッセージを何故あえて無料で配布したのか。商業出版の研究は、資本原理に動くホモ・エコノミクスを前提としてきたといえるが、施印はむしろ社会原理に駆り立てられ



る人々の視点を加えることにより、バランスの取れた近世書物文化史への糸口となれる。

以上、施印とは何かという問題意識を踏まえ、本稿では、近世後期京都にあった「孝学所」の施印を事例に、当所の社約『孝学社中』実明記』と、施印自体に記されている「施印マーク」を主な史料として、その流通（書物史的問題）と意味（思想史的問題）を検討していきたい。

## 一 孝学所の発端

施印の糸口として着目する「孝学所」とはどのようなところであつたか。簡単にいえば、河瀬友山（一七九一〜一八五七）という人物が京都の水火天満宮境内において設置した、孝道を広めるための組織であつた。残念ながら、孝学所に関する大部分の第一次史料は紛失されてしまったため、その発端の詳細を窺い知ることが困難である。<sup>④</sup> 友山が養老の滝伝説に登場する孝子の子孫であるという由緒書が現存しているが、もちろん伝説自体にも信憑性がなく、友山以前に、河瀬家の誰かが「孝学」め

いた活動を行った資料的根拠もない<sup>⑤</sup>。孝道を広めはじめた時期も詳しくはわからないが、友山の二男友明（一八二七〜一九一七）との聞き取り調査を踏まえてできた『朝日新聞 京都附録』（大正五（一九一六）年七月二八日）の記事は、以下のように述べている。

幼い頃の友山翁に付ては漢学者、関屋佐一に文字を学んだといふより外に何も知られて居ない。関屋家は今現に本巢郡の鳥場村に居ります。文字を知つてからの友山は幼き眼に映る養老の蛾眉山脈を無限の崇敬を以て仰ぎ見たに違ひありません。養老の山に湧き出づる滝の水、それを汲んだ遠い先祖の友人の姿、まめくしく親に奉仕する孝養の家庭、此等が一々友山の優しい感情に刻み付けられたに違ひありません。斯く刻み込まれた諸々の印象が一の抱負として体现された時彼は孝の宣伝者として天保九年の春の頃始めて京に上つたのでした。実に四十八歳の分別盛りで、その著「孝行鏡」の自序によると、西洞院通下立買上る所に孝学堂を開いたは同年六月二十五日だとあります。燃ゆるが如き熱烈な弁は直に聴者を魅するに足るものがあつたでしやう。寺院や



神社や私人の宅を借り受けて到る処に孝道を説き廻りました。一度孝学堂の門を潜つたものは不孝をやらねぬ証拠に孝行皿一枚宛をくれました。孝養門と名くる印刷物をも頒けました。斯くしてその教へを享くるもの日々に増加して今は学堂も狭きを訴へるやうになつたので、天保十二年正月二十九日に堀川頭水火天神の処に引移つて新に講堂を開いて之を孝学所と名づけました。其年三月二十四日養父（従弟）友義から家督を譲り受けたのである。

以上の事実関係のすべてを現存史料で裏付けることはできていないが、すくなくとも矛盾はしていないため、新たな史料が浮上しないかぎり、この記事に従いたい。

## 二 孝学所の活動

孝学所の活動を展望できる史料として、『（孝学社中）実明記』（のち、『実明記』と略す）がある。題名からもうかがえるよう、孝学所の社約という性質のもので、一丁にわたつて、その思想・制度・活動をかなり丁寧に述べているものである。それによると、河瀬友山が普及

しようとした孝道は、具体的に「儉約の孝徳」であつたことがわかる。

儉約の孝行すれば、其孝銭年月積りて孝太なり。  
其孝代も積り、銭の内にて一日に一銭宛の施しをして、孝徳を積が孝学の社中に連りたる所詮なり  
（二丁ウ・二丁オ）<sup>(8)</sup>

要は、孝学所の所属会員に求められているのは二つのことである。第一に、儉約して、「孝銭」を貯金する。その儉約方法とは、「買物等ハ猶更に十銭の買物も八文と孝行し、百文の入用も爰が孝行じやと思ひ、八十文にて辛抱」するように、日常生活の出費を八割で抑えることである。貯金の用途について、例えば、女子は自分の「嫁入りの拵へ」、男子は「世帯の入用」という例は挙げられているが、詳細な規定はなく、各家庭の判断に任された。むしろ、孝学所の立場からして、「衣類・食事・諸道具・万事に至る迄、我分限を顧て奢らぬ様心掛、天地の父母の御心を安んずるのが孝行なり」というので、節約を通して養われる分限意識や私欲抑制力が狙いであつたと考ええる。

この「孝銭」のほかには孝学所会員に求められたことは、

一日一錢を孝学所に寄付することである。この寄付金は、いわば会費であり、孝学所が運営される資金となった。その用途は、大体三つに分けられる。第一に、孝学所が行う祈願・祈祷・供養の経費である。具体的にいえば、てんがたいへい しんかくほうとう ごくこかあんぜん こうろはんじやう 天下泰平・諸穀豊穰・御国家安全・孝行繁昌・孝こうよう 心成・就の御祈祷料○孝連人々の先祖代々両親へしんじやうじゆ ごきとりやう こうれんにんじん せんぞだいにりやう 孝養の為、永代の御供養料○永々御膳・御燈明料こうよう たゐ えいたい ごきようりやう せいゝごぜん をとうめうりやう ○御神酒・御餅・菓子其外一切御備へ物料と成をミキ をもち くらしそのほかいつさいのそな もりやう

(二丁ウ・三丁オ)

第二に、河瀬友山が各地で行う「孝席」(講席)である。「孝席」自体は無料で提供されたので、これらにかかる経費(宿泊と飲食費であろうか)は孝学所が負担しなければならなかった。神戸・大阪・美濃・飛騨・江戸などにも出張したが、伏見奉行の内藤豊後守の支援をえて、「伏見孝釈所」での孝席がもつとも多かったと思われる。<sup>(10)</sup>

第三に、出版物である。孝学所が発行した出版物を、その用途において二種類に分けることができる。孝学所会員向けのもの、一般向けのものである。前者の検討は本稿にて省略するが、後者については、施印もその範疇に入るので、次節以降に詳述する。

### 三 孝学所の施印

孝学所がいつまで続いたのかは不明である。設立者友山は安政四(一八五七)年三月に没するが、安政五年の刊記を持つ出版物も存在しているため、<sup>(11)</sup> 孝学所は天保十二(一八四一)年開所から、少なくとも十六年間は活動を続けていた。<sup>(12)</sup> その間、数多くの私家版を世に出したため、その分の運営費、転じて会員数が確保できるほどに繁昌していたと考える。

しかし、孝学所の盛んな出版活動を整理しようとする、いくつかの難題に直面する。第一に、私家版であるため刊記情報が乏しいこと。書肆仲間を経由せずに出版されたため、刊年などを明記する義務もなく、不記の場合が多い。よって、出版順を特定することが極めて困難である。第二に、再版・改版が多いこと。営利目的でない私家版であるため、大量生産の必要性もなく、必要な時に、必要な部数を増刷したと考えられる。このために生じた内容と装丁における異同もまた整理しにくいのである。第三に、河瀬友山本人ではなく、弟子による出版



表1 孝学所出版物一覧

	題名	丁数	寸法	刊年
1	孝養門 全	7	半紙本	1832
2	孝学感応録 和合編	8	半紙本	不記
3	孝学感養記 和合編	15	半紙本	1847・改再版
4	孝学食礼記 和合編 全	13	半紙本	不記
5	孝学祭祀記	5	半紙本	不記
6	孝学食慎録 和合編	23	半紙本	1847・再改版
7	〈孝学社中〉天明記 全	10	半紙本	1849・再改版
8	費八分記 完	8	中本	1851
9	いろは歌孝行鏡	6	半紙本	不記
10	〈水火和合〉灯明記	2	半紙本	不記
11	孝学衣慎録 和合編	37	半紙本	1858・再改版
12	孝掟	1	31.8x68.7	1841・再改版
13	いろは歌孝行鏡	1	27.9x39.3	1855
14	孝学講釈	1	19.5x26.7	不記
15	大聴利徳の最上	1	24.8x34.7	不記
16	孝行繁昌・孝心成就	1	23.8x16.7	不記

物も多い。これら書物を孝学所のものとして見るべきかどうかも判定しづらいところである。

以上の理由から、現時点で細部まで行き届いた出版物一覧を提示することは到底できない。しかし、本稿の趣旨からして、孝学所の出版活動全体をある程度捉える必要があるため、以上の難点を述べた上で、孝学所の出版物を【表1】に整理した。

では、孝学所の書物のうち、果たしてどれが施印に当たするのか、それを識別するのは極めて困難である。というのも、もし施印を教化目的で無料配布された印刷物と、従来どおりに定義するならば、教化の範疇をどう設定するかという問題を取りあえずしておいても、配布方法に関する確定的な証拠がない以上、施印と断定することが不可能である。万一、無料配布のつもりで出版されたことが印刷物に書かれていても、それが実際に行われたかどうかはまた別の問題である。また、同版の書物が、一部は無料で配布されたり、一部は有料で配布されたりしたことも論理上にあろう。さらにいえば、最初に無料で配布された書物が、その後誰かに販売され、転売され



表2 孝学所施印一覧

	題名		所蔵	施印マーク
2	孝学感応録	A	東洋大学	施主西村氏
	同	B	京都女子大学	施主西村氏
	同	C	水火天満宮	施主西村氏
3	孝学感養記	A	岐阜県図書館	自他法界/平等利益/尾州春日井郡王野村/小嶋小十郎印施
	同	B	水火天満宮	自他法界/平等利益/大阪堺筋南久太郎町/菅野直次郎
	同	C	国学院大学	自他法界/平等利益/大阪堺筋南久太郎町/菅野直次郎
	同	D	私蔵	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	E	私蔵	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	F	私蔵	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	G	私蔵	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	H	水火天満宮	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	I	奈良教育大学	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	J	滝中学校・滝高等学校	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	K	筑波大学	自他法界/平等利益/尾州熱田駅/新桔梗屋喜三郎印施
	同	L	筑波大学	孝学に便りにも成かして/浮世の風にちらす言の葉 尾州熱田駅/新桔梗屋/施主喜三郎
	同	M	水火天満宮	施主某
4	孝学食礼記	A	筑波大学	孝学に便りにも成かして/浮世の風にしらす言の葉 尾州熱田駅/新桔梗屋/施主喜三郎
	同	B	水火天満宮	六十越て一孝立る食礼記/本卦帰りの家土産にせん 京都西村卯の母/恵順尼/彫板施主
	同	C	内藤記念くすり博物館	六十越て一孝立る食礼記/本卦帰りの家土産にせん 京都西村卯の母/恵順尼/彫板施主
5	孝学祭礼記	A	国学院大学	京都上堀川水火天神孝学所/施配方/施主
	同	B	内藤記念くすり博物館	京都上堀川水火天神孝学所/施配方/施主
6	孝学食慎録	A	水火天満宮	名古屋車之町/丑田喜兵衛印施
	同	B	玉川大学	名古屋車之町/丑田喜兵衛印施
8	費八分記 完	A	水火天満宮	施主堅田浦西年女
	同	B	玉川大学	施主堅田浦西年女
10	〈水火和合〉灯明記		私蔵	水火天神孝学所孝弟/孝湖堂法橋友義施印 北野天満宮工大願成就 為恩礼報謝婦女施印
11	孝学衣慎録		岐阜県図書館	濃州不破郡表佐村/孝学社中施板
12	孝掟		水火天満宮	孝学道人孝弟/湖東孝湖堂友義印施
13	いろは歌孝行鏡		私蔵	濃州郡上八幡御城下孝聞中施板
14	孝学講釈		国学院大学	施配方孝弟中
15	大聴利徳の最上		私蔵	尾州熱田駅/孝聞中施板
16	孝行繁昌・孝心成就		水火天満宮	飛州高山孝学社中施印

ることともまた可能性として否めない。一冊の書物が、その寿命において、たまに施印として、たまに有料の書物として流布していくこととなる。これらの可能性を考えると、教化目的で無料配布された印刷物、という定義は施印の分析を困難にさせていることがわかる。

よって、本稿においては、分析の実用性を重視し、別の定義を採用する。施印を、施印であることを明記する書物とする。要は、一つの書物は実際に無料配布された確定的な証拠がなくても、施印であることを表明している限り、それを施印と捉える。その表明は、孝学所の書物の場

合、文章の末尾や見返し（前・後とも）に「〇〇施主」「〇〇施印」「〇〇印施」「〇〇施板」の印が付いている形を取る。これらの印を「施印マーク」と名付けたい。孝学所の書物の全国調査の中で、施印マークが付いているものだけを整理したのは【表2】である。これらの施印の流通と意味について、『実明記』と「施印マーク」を手掛かりに、次節において分析していく。

#### 四 施印の流通と意味

孝学所の施印は、それを施した人すなわち施主にとつてはどのような意味をもったのか、そしてそれがどういった手段で読者に届けられたのか。この流通と意味の問題を説明するため、本節は主に孝学所の社約『実明記』と、「施印マーク」という二つの史料を利用するが、その分析を分けて行うこととする。というのは、前者は孝学所の理念を体系的に述べるものに対して、後者は孝学所の実践を断片的に表すものであり、史料の性質は異なるからである。分析こそは別に進めるが、その結果は合わせて孝学所の実態を物語っていると考える。

#### （一）『実明記』が物語る施印

##### 流通

孝学所の施印は会員にも渡されたようだが、問題は非会員への流通である。会員である以上、連絡が取れるつてがあり、また本人が孝学所のメッセージに共鳴し、施印の内容に関心があることは自明である。しかし、会員でない、その他の不特定多数の人々から、施印が渡されても真摯に受け止めてくれる人をどう見つけるのか、これが普及活動のボトルネックとなる。孝学所はその難点をくくるために「施配方」という配布担当役職を設け、それを「施配惣締方」の監督のもと、配布に努めさせた<sup>(13)</sup>。

配布を監督するのは、もちろん流通管理上のメリットも考えられるが、その他、公儀を意識した対策でもあったようである。施印とは書物仲間を経由して流通していない以上、法律的な縛りが薄かったかもしれないが、孝学所は伏見奉行の支援も受けていたため、発信しているメディアにある程度は慎重でなければならなかった。そ



の憚りは『実明記』においても反映されている。

孝行を導くを御上ミへの奉公とす。故に孝学の導に附、誹謗の筋有之候ハ、陰言を止て、

無遠慮尋聞にて被成候。若、妬誹等を以て孝導を妨げ善行を差押る杯の不孝者有之におゐてハ、

無、抛其次第相達し可奉申上候成と有(五丁ウ)

孝学所の活動を悪くいう人がいれば、悪口をもつて反応するのではなく、報告するようにと促している。会員は勝手に孝学所を代弁しようとする、もめごとが悪化し、孝学所の印象が悪くなる心配から生じた規定である。同じ懸念は施印に関しても存在したことは、『孝掟』

からもわかる。

施本のケ条摺物・施し扇・所々の孝席・常灯・御膳そなへもの永栄御祈禱の雑用となり。

孝中施配方の面々これを取扱ふ。審ならず正しからざる事ハ、決て取用ひざるが孝学一派の定式にして、孝を積、益を施すの最上也

孝中施配方を設けることにより、「審ならず正しからざる」情報の濫用を防ぎ、個人が確かなる功德を積める

こと、国益をもたらせることと同時に、孝学所が世間的なトラブルに巻き込まれないようにも読める記述である。では、施配方はどのように施印を配布したのであろう。『実明記』に引用されている、孝学所が「諸国辻・小路・接待所・市中茶屋門」などに貼りだした「施印弘め」はまず二つの手段を明記する。

京都堀川頭 水火天神の御社孝学性より、孝行に基附べき様の書類・摺物・施しに出し候間、思、召の御方ハ無遠慮受に御越可被成候。孝学孝釈孝席ハ何れに御座候共、謝礼・席料等ハ一切受不申候。施印の摺物ハ席毎に出し候なり(六丁才)

要は、第一に、関心のある者が直接孝学所まで足を運んで、施印を取りに行く手段があった。また、第二に、孝学所によつて行われた講釈の際、聞き手に配るパターンもあったのである。これらに加えて、第三に、施印版木の貸し出しも行われた。『費八分記』の末尾の注意書で、その行為がこのように促されている。

此書中の益味、宜敷と思、召方々ハ御遠慮なく御再板被成、山家・海浜までも広く御弘め下され度



候。且又、施主の御志ある御方へハ板行御かし  
申上候間、是また御遠慮なく御つかひ可被下候（九  
丁才）

書類上に確認できるパターンはこの三つのみだが、このほかにも存在した可能性がある。また、これらのパターンは全ての施印に実施されたのか、それともなんらかの事情により使い分けられたかどうかも課題として残る。

## 意味

孝学所の多くの書物はなぜ施印として出されたのか。結論から言えば、「功德を積む」と「名を後世に揚げる」という、孝学所の会員にとつての二つの課題と関係する。孝学所は孝道を広めるための組織であつたことは上述したが、その具体的な実践は「功德を積む」ことにあつた。というのは、河瀬友山の「孝」理解とは、両親への孝養という狭い意味を超えた、壮大なスケールのもので、「孝」は「諸道の要、善行の根元、積徳の最上」であり、その実践は、「災難消滅・富貴繁昌」や、「無病延命・信心成就・天下泰平・国家孝行・諸穀

豊穰」（一丁才）をもたらす効果があるという立場であつた。道徳のすべてが「孝」に始終しており、その実践は世の中を全体的に良くする。このような「孝」理解は「功德」に近いことは言うまでもなく、友山自身も、その著作の中で「功德」を「孝徳」にモジることが多いため、もとより「功德」を発端に、自分の「孝」思想を構築したと考える。

では、功德は施印とどう関係しているかについて、『実明記』ははつきりとう書いている。

世に功德を積の最上を尋る人有しに、孝師答て曰、「国益に成べき善行の書物、又諸人の為筋に成べき孝書を世に広く施すが最上なり」と宣へり（三丁ウ）

「孝師」とは孝学所内の肩書であり、それが具体的に誰を差しているかは不明だが、その主張はおそらく河瀬友山の立場を代弁している。書物を施すのは、「功德を積の最上」である。この場合の書物は、文章に表紙をつけて綴じれば何でもよい類のものではなく、「国益」もしくは「諸人の為筋」に役立つための本でなければならなかつた。この点について『孝学感応録』には次のような補

足がある。

益なき書物杯ハ決して施すべからず。著者ハ暇有にもせよ、読見る人の日間費紙の費が大イなり。無益の書物を施してハ却て陰徳を破るべし。其外巻紙等にも無益に白紙を書費すべからず（二丁ウ・三丁オ）

施印は軽々しく出すものではない。それなりの内容を準備できなければ、却って読者の時間と、紙の資源を費やすこととなり、世に不益をもたらすこととなる。納得のいく主張だが、人の暇と世の資源を気にするほどのであれば、そもそも口頭で伝えてもよかった。にもかかわらず、なぜ孝学所はあえて「書物」にこだわったのか。『実明記』はこう説明している。

食を施す共、暫くの口服を養ふまで也。金・銀・銭を施す共、当時の窮難を防ぐ迄也。広く国益と成、永く後世迄の孝徳に八成べからず。施しも仕様によつて徳を失ふ事も有べし。書物ハ万代に残り朽ざるの益宝なり。代々の人が見る度毎に善道に感ずれば、譬用る迄に至らず共、自から一善生して一悪去べし。若一ケ条にても用ひる人

有時ハ、其功德は孝太無量にして尽すべからず。又見聞に感じて写し用る人も有べし。又借受て読で感ずる人も有べし。然ハ後世至て一枚の書物を以て幾十人善道に感ずるも計り難し。一人感じても一善生じて一悪去。其感徳ハ皆施主の身元へ帰り不思議の功德を蒙るべし。故に当孝学門におゐてハ孝の社中へ連りし人を施主の元として、国家万民の為に孝養の書物を広く世に施し孝行を勧るを第一とす（三丁ウ・四丁オ）

書物は「万代に残り朽ざるの益宝」であり、時間と空間に拡充していく機能性がある。時間とは、書物が読書されることを通して消耗されないため、所有者から所有者へ譲られ、代々伝承されていく。空間とは、書物の内容を知ることができるのは、所有者はもちろん、借用や写筆、読み聞かせなどを通して、他人まで及ぶことを表している。書物の功德は時空に広がり、だんだん増していくものである。そして、膨大な功德はすべて書物を施した者に還元されていく。

そもそも、功德を積むことは、配布する以前の段階から始まっていたのである。孝学所には、以下のような興



味深い実践があつた。

尤<sup>もつとも</sup>其<sup>その</sup>施<sup>い</sup>し出<sup>いだ</sup>す所<sup>ところ</sup>の施<sup>せ</sup>本<sup>ほん</sup>・摺<sup>すり</sup>もの等<sup>とう</sup>にハ深く慎<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>を込<sup>こ</sup>め、供<sup>き</sup>養<sup>よう</sup>・祈<sup>き</sup>禱<sup>とう</sup>の精<sup>せい</sup>力<sup>りき</sup>を納<sup>おさ</sup>め『孝<sup>こう</sup>養<sup>よう</sup>文<sup>もん</sup>』真<sup>しん</sup>読<sup>どく</sup>勤<sup>きん</sup>行<sup>ぎやう</sup>の孝<sup>こう</sup>徳<sup>とく</sup>を積<sup>つみ</sup>、而<sup>しかん</sup>後<sup>のち</sup>に施<sup>せ</sup>し出<sup>いだ</sup>すなり(四

丁才・五丁ウ)

施印は、単なる書物と違って、そこに精力を込める必要があり、その手段として『孝養文』の真読勤行が実践された。『孝養文』は、孝学所入会の際、会員に渡された、僅か四〇〇字弱の文章である(「翻刻1」)。文章の冒頭に「奉清浄拝読」とあり、本文の「孝」字が一貫して台頭されていることから、ある種の「聖」なる性質を帯びたテキストであったことが明らかである。朗読を通して、その「聖」を施印にも注入しようとした実践であらう。『孝養文』の朗読効果について、同じく新会員に渡された『孝養文功德書』も詳しいので、併せて参照していただきたい(「翻刻2」)。

以上、施印と「功德を積む」とこととの関係を解明したが、「名を後世に揚げる」ことはどうであらう。表現自体はもちろん『孝経』(開宗明義章)に由来し、そこに「身を立て道を行い、名を後世に揚げ、以て父母を顕す」こ

とが、「孝の終わり」の命題として明記されている。両親から授かった身体に傷をつけないのが「孝の始まり」だが、立身出世して、善業や偉業を通して、同じく両親から授かった名を世間に轟かせ、後世にも忘れられないようにすることが求められた。この命題は、友山にも強く意識され、その著作に一貫している。例えば『孝学衣慎録』の主題である「衣を慎む」べき理由も、以下のように、名を揚げる措置として説明されている。

名<sup>な</sup>を揚<sup>あ</sup>げ、道<sup>みち</sup>を行<sup>おこ</sup>ひて、後<sup>のち</sup>世<sup>よ</sup>の榮<sup>さか</sup>へを願<sup>ねが</sup>ふ人々ハ、先<sup>ま</sup>衣<sup>い</sup>類<sup>るい</sup>より慎<sup>つ</sup>しむべし。釈<sup>しやく</sup>伽<sup>か</sup>ハ捨<sup>すて</sup>れる継<sup>つぎ</sup>切<sup>き</sup>を拾<sup>い</sup>ひ、是<sup>これ</sup>を縫<sup>つぎや</sup>合<sup>あ</sup>せ、衣<sup>い</sup>服<sup>ふく</sup>とす屎<sup>ふん</sup>葬<sup>ぞう</sup>衣<sup>い</sup>とか号<sup>な</sup>て、今<sup>いま</sup>の七<sup>しち</sup>條<sup>じょう</sup>袈<sup>け</sup>裟<sup>さ</sup>則<sup>すなは</sup>ち是<sup>これ</sup>なり。衣<sup>い</sup>を先<sup>ま</sup>として身<sup>み</sup>を慎<sup>つ</sup>し、本<sup>ほん</sup>朝<sup>ちやう</sup>まで其<sup>その</sup>名<sup>な</sup>高<sup>たか</sup>く釈<sup>しやく</sup>尊<sup>そん</sup>と敬<sup>うやま</sup>へ。又<sup>また</sup>往<sup>むか</sup>古<sup>こ</sup>より一<sup>いつ</sup>派<sup>ぱ</sup>を開<sup>ひら</sup>ひて、名<sup>な</sup>を後<sup>のち</sup>世<sup>よ</sup>ニ伝<sup>つた</sup>へる祖<sup>そ</sup>師<sup>し</sup>ハ、皆<sup>みな</sup>供<sup>く</sup>ニ先<sup>ま</sup>衣<sup>い</sup>服<sup>ふく</sup>より慎<sup>つ</sup>し、破<sup>やぶ</sup>れ衣<sup>い</sup>ニ千<sup>せん</sup>切<sup>き</sup>袈<sup>け</sup>裟<sup>さ</sup>、蒲<sup>が</sup>の脛<sup>ひざ</sup>布<sup>ふ</sup>ニ切<sup>き</sup>草<sup>さ</sup>履<sup>り</sup>、身<sup>み</sup>の飾<sup>かざ</sup>りを慎<sup>つ</sup>し、孝<sup>こう</sup>名<sup>めい</sup>を後<sup>のち</sup>世<sup>よ</sup>に揚<sup>あ</sup>げ、父<sup>ふ</sup>母<sup>ぼ</sup>を顕<sup>あら</sup>はし、衆<sup>しゆ</sup>人<sup>じん</sup>より永<sup>なが</sup>く参<sup>さん</sup>拝<sup>はい</sup>の尊<sup>そん</sup>敬<sup>けい</sup>ニ預<sup>あづか</sup>られしなり(二

十七丁ウ)

釈迦が日本に知り渡るようになったのは、その亀末な服装のためであった論理はやや強引であるが、これはむ



しろ友山の「孝」構想の醍醐味でもある。要は、如何に些細にみえる物事でも、実際「孝」の範囲内にあり、思わぬほど大きな効果をもたらすことができる。服装を慎みさえすれば、誰だって釈迦のようになれる可能性さえ秘めている論理である。施印の意義もまたこの論理の延長線にあることは、以下の『孝学感応録』の記述からもうかがえる。

釈迦しやくかも広く経きやうもん文もんを施ほどこして本朝ほんちやうまで釈尊しやくそんと敬うやまれ、孔子こうしも経書きやうしよを施ほどこして文宣王ぶんせんわうと国家こくわまで尊とうとむなり。皆是書そのくにの施そのなし有あるが故ゆゑなり。書しよの施しやくしなかりせば、其国そのくににても其名そのなを知る人しる稀ものまれなる成なべし。是等これらも皆親先祖みなおやせんぞへの孝行やならず哉や（二丁オ・二丁ウ）

書物は人の為になる情報を時空超えて伝達させるメディアであると同時に、その著者の姓名を広く後世に伝えるものである。釈迦と孔子のような聖者でも、書物の力なくしてその存在は忘れられたかもしれない。一冊の施しでも、名を揚げ、親孝行の命題を果たすための一歩であるという孝学所の主張は、名を後世に残す手段がさほど多く整備されていなかった庶民層にとって、大変魅力的なテーゼであったと思われる。

## （二）「施印マーク」が物語る施印

### 流通

施印マークを見渡すと、その一部が極めて類似していることが目につく。たとえば、『孝学感養記』[3A] [3B] [3H] や、『孝学食礼記』の [4A] [4B] のマークは同様な意匠のもとで作られたことが一目瞭然である（資料の施印マーク図画は本稿本文の末尾に付した）。この統一性は何を意味するのか。一つの可能性として、上述した孝学所の統括が考えられるが、デザインの統一性は施印マークの一部にしか見られない以上、説明が付きにくいのである。もう一つの可能性として、施主がすでに流通している施印マークを真似たことである。しかし、同じデザインは、同名の書物にしか見られない。もし単にデザインを個人的に真似ることがよく行われた行為だとすれば、もっと広い範囲における類似性が確認できるはずである。

ならば、デザインの統一性のもっとも納得がいく説明

として、施主同士が合意して、集団としてデザインを決めたことである。そして、たとえば【3A】【3B】【3II】に見える「自他法界／平等利益」という表現は、その集団はある程度、孝学所の統括から独立な立場であったことを示唆している。この表現は一つの行為が宇宙全体に平等に益するという意味の仏語であり、宗派を問わず、祈願や塔婆によく使われる文言である。その趣旨は、孝学所が施印に対して懐いたスタンスと一致するものであるが、文言自体は孝学所の書物に一切表れていない。ならば、その提言は孝学所から降りてきたよりも、施主本人から考案されたと考えるのが自然であろう。要は、孝学所は、施印の流通をある程度監督しようとしたが、詳細な規定は設けなかったか、実施しなかったか、できなかったかということになる。施主行為は、ある自主性のもので行われたと考えるべきであろう。

施印マークが押された位置も検討すべき対象である。上述したように、マークがあるのは、たいてい、末尾から見返しである。また、同じマークが複数の本にある場合、たいてい同じ頁かつ同じ位置にあるので、何らかの拘りがあった可能性が高い。私費を出して、せっかく施主と

なった書物にマークを付ける際、それを適当に押したとは考えにくいのである。ならば、位置の差をどう説明すべきか。二つの事例を通して考えてみたい。

まず、【3I】と【4A】をみていただきたい。同じマークが異なる書物に、異なる頁に押されている。発行順序は断定できないが、おそらく【4A】が先、【3I】が後となる。というのも、マークは大体同じところで押されていることを考えると、もし【3I】が先であれば、【4A】のマークも見返しに押されたはずである。逆にいえば、【4A】が先で、【3I】のマークが見返しに移ったことは、末尾に押すスペースを十分に確保できなかったと想定できるのである。こういう事情が生じたのは、孝学所による書物発行と、施主による施主行為は個別の作業であり、協同関係がなかったか、薄かったということである。お互いに合わせる必要性はなかったようである。

次に、【2A】【2C】の「西村氏施印」マークの位置の差に着目していただきたい。<sup>(13)</sup>この現象に二つの解釈があると考え。第一に、意図的に生じたと考ええるならば、施主が自分が施す本を施した後にも、識別できるための目印をつけたかったことが考えられる。上述したように、



施印の一つの魅力はその拡充性にあった。時代的にも、空間的にも広がる可能性を秘めたものであった。ならば、自分が施す本の施印マークの位置をずらすことにより、のちほどその本がほかの人に譲られても、もとの被施配者が特定できる。これは、誰がいつごろどの経由で入手したのか、という時空の拡充性を観念的ではなく、肌で感じることである。施印マークはこのようにして、いわば追跡装置の機能を果たした可能性がある。

さらに一つ、施印マークの位置変更が無意識に生じたと考えるならば、施主がこのマークを別の時期に押した解釈がもつとも腑に落ちる。というのは、自分がこれから施そうとする書物に一齐に施印マークを押した場合、流れ作業ですべて同力所に押すはずである。マークがずれているということは、施主は必ずしも自分が施す書物を一括で施すのではなく、必要な時に、必要な分だけを手して施したことを物語っている可能性がある。要は、一回限りの行為ではなく、継続的に進めたということになる。

## 意味

施印を施すことは施主にとってどのような意味があったのか。一部の施印マークに、「自他法界／平等利益」という表現があったため、その施主は孝学所の「功德を積む」命題に共鳴したとうかがえるが、「名を後世に揚げる」ことについてはどうであろう。マークの名義を見ると、これは一見さほど大事にされなかったようである。というの、このマークに三つのタイプがある。第一に、「施主某」などを記す匿名マークである (330)。第二に、「孝学社中」「孝聞中」「孝弟中」といった形をとる集団名義である (35A) (11) (13) (14) (15) (16)。第三に、施主一人を記す個人名義である (3ABIII) (4AB) (6A) (12)。「名を揚げる」目的からして、匿名と集団名義は意味をなさないことはもちろん、個人名義でさえ、氏名の一部や出身地といった限られた情報しか公表しないマーク (22AC) (8A) (10) もあるため、あまり役に立たない。この孝学所の「揚名」理念と、施主の実践との矛盾をどう説明すべきか。背景には「陰徳」と「揚名」との葛



藤があると考える。孝学所は、「功德を積む」を第一としたことは上述したが、実はその功德は「陰徳」、すなわちに人に知られないところの功德として言及されている場合も多い。河瀬友山が孝学所を設置する以前に広めた施印では、「人我を敬ざるハ我不徳と心得、弥陰徳を積むべし」や、「衣体ハ見苦しく人に侮られるを陰徳といふべし」、「財宝よりハ陰徳を積で子孫へ譲るべし」とある<sup>(17)</sup>。また、『孝学衣慎録』の序文を寄せた淡海源芝という方は、河瀬友山の活動を「平生孝道ヲ説キ、旁ク陰徳崇儉ヲ講ジ、書事ヲ以テ世ヲ教導ス」（原漢文）と表現している。

だが、孝学所が求める「功德」を「陰徳」だとすれば、それが「揚名」命題と相反していることが分かる。匿名に陰徳を積むか、堂々と名乗って揚名するか、という選択肢の前で、人々は戸惑ったはずである。実際、その躊躇を回避するための措置が『実明記』において示唆されている。

孝の本へ御名前出だす事御遠慮の御方ハ、御社中の孝名帳へ記納る而已にて、強て名前を出すにハ及び不申候。社中に連り姓名を顕し出す事ハ名利・名聞にあらず、孝学の本意に任せ、先祖の血流を明らかに、孝名を後世に伝へ置ハ、先祖親々江の孝養

にして、子孫永栄の為筋、孝行に導の便りにも相成べし（三丁ウ・四丁オ）  
（あななる）

孝学所の書物では、「孝」字を同音のものに入れ替えてモジることが多いため、ここである「孝の本」も「此の本」と読むべきであろうが、それが具体的にどの本を差すかは不明である<sup>(18)</sup>。筆者はそれを広く施印と理解するが、どの本であろうとも、この記述からは三つの重要な点がわかる。第一に、人々は名前を公表することをためらっていたこと。第二に、名前を公表することが「名利・名聞」のためでないこととあえて強調されているところから、公表躊躇の背景に、世間にそう勘違いされる恐れがあったと考える<sup>(19)</sup>。第三に、たとえ公表しなくても、「先祖の血流を明らかに、孝名を後世に伝へ置」くことが大事であるため、その代わりに孝学所で管理されたであろう「孝名帳」に姓名を記すことができたのである。

『実明記』にうかがえるこの心理が施印における姓名公表にも働いたとするならば、匿名名義と断片的な情報しか記さない個人名義の存在も納得がゆく。孝学所会員は「揚名」はしたいが、同時に「陰徳」も積みたく、世間に「名利・名聞」と勘違いされるのも避けたい。姓名

を公表しないことがこの葛藤への妥協として生じたであろう。しかし、これは没個性的な意味合いがないことは指摘しておく。個人名義の施印マークは、書物一部につき一つしかない。【3A】【3B】【3C】に見られるような、同士企画されたと思われる施印も、各施主が施印を個別に出したのである。というのは、個人名義で出された施印に伴ってくる「陰徳」や「揚名」効果は、人と共有すべきものではない、むしろ強い個人意識があつたと考える。

## おわりに

孝学所の施印を事例に、当所の社約『実明記』と、「施印マーク」を主な史料として、その流通（書物史的問題）と意味（思想的問題）を検討してきた。当所の文書類はほぼすべて紛失され、限られた資料的狀況のもと、憶測を働かしたところも多々あり、本稿をもつて施印のことを言いつくしたとは到底いえない。そもそも、施印に関する先行研究が乏しいため、孝学所の事例が異例なのか、代表例なのか、それすら決めつけることが現時点で危ういのである。そういう意味で、本稿は試論で終わっ

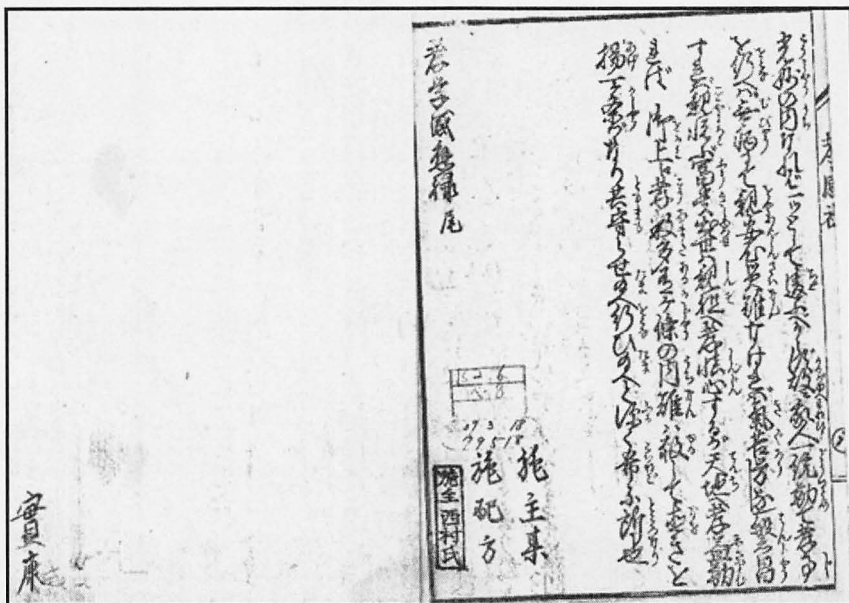
たと認めざるを得ない。

しかし、試論とはいえ、すくなくとも以下の三つを示すことができたと考える。第一に、従来の研究は施印の書物史・思想的な可能性を見落としていた。第二に、その可能性を引き出すために体系的な検討が必要である。第三に、体系的な検討のため、施印を「施印であることが明記されているもの」と再定義し、「施印マーク」に着目すること有効的である。

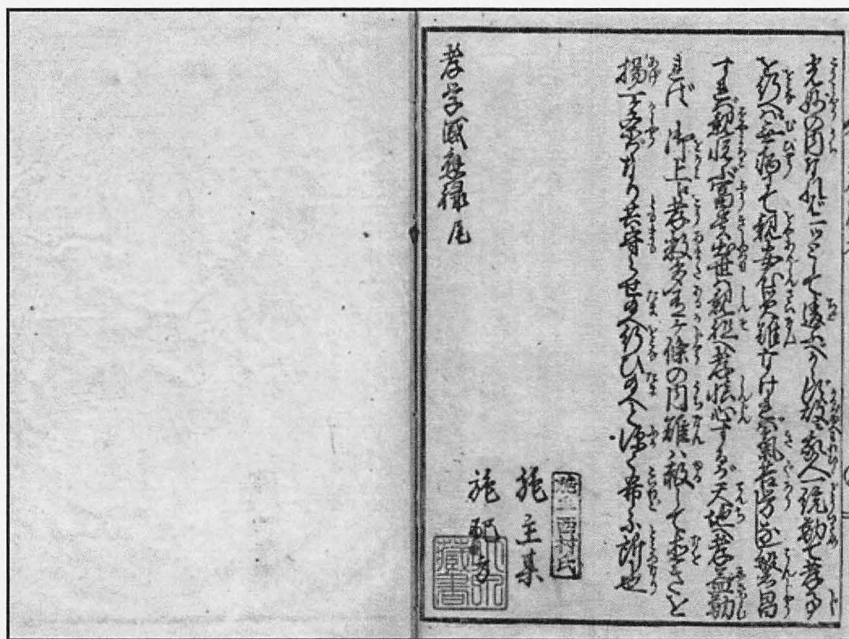
この三つの指摘には、施印が研究者の視野に入る望みはもちろんだが、そのほかに、古書店・資料館・図書館等に勤めている方々への呼びかけも含まれている。施印の体系的な研究のためには、まず施印を体系的に収集することが必要であるが、先行研究と同様、図書を取り扱う機関においても、施印が充分に着目されてこなかったため、大体の目録やデータベースに、施印であるという書誌情報が入っている場合が多い。この点を改善してはじめて、施印の体系的な検索、転じて本格的な研究が可能となる。学界の商業出版への執着によって埋もれた、もっとも熱い志の近世出版文化史が描けられるように、ご協力をお願いしたい。



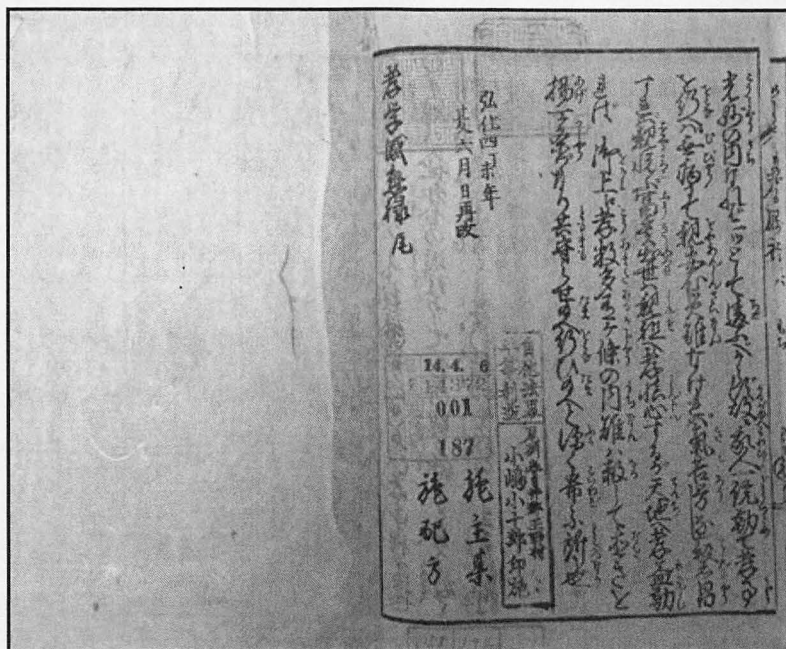
図画の部



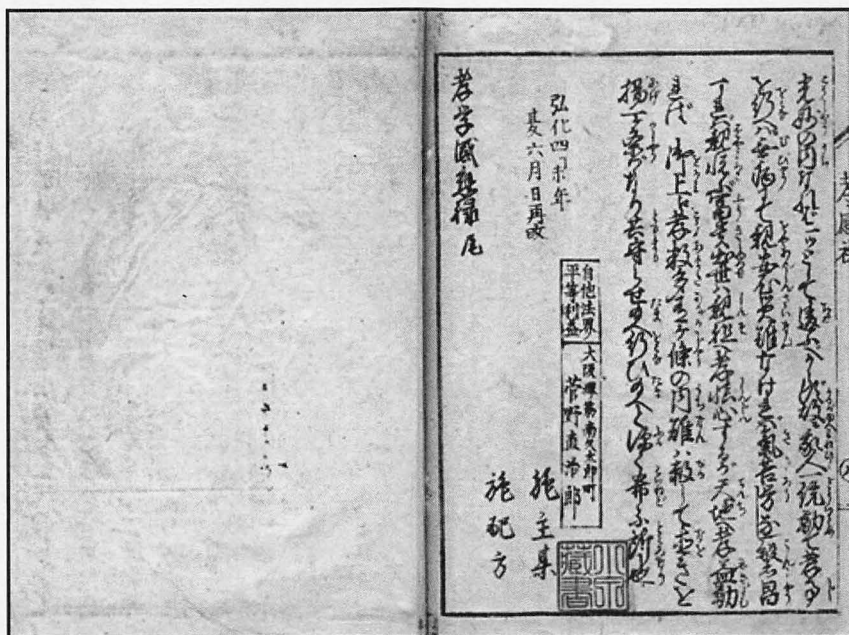
【2A】『孝学感応録 和合編』巻末



【2C】『孝学感応録 和合編』巻末

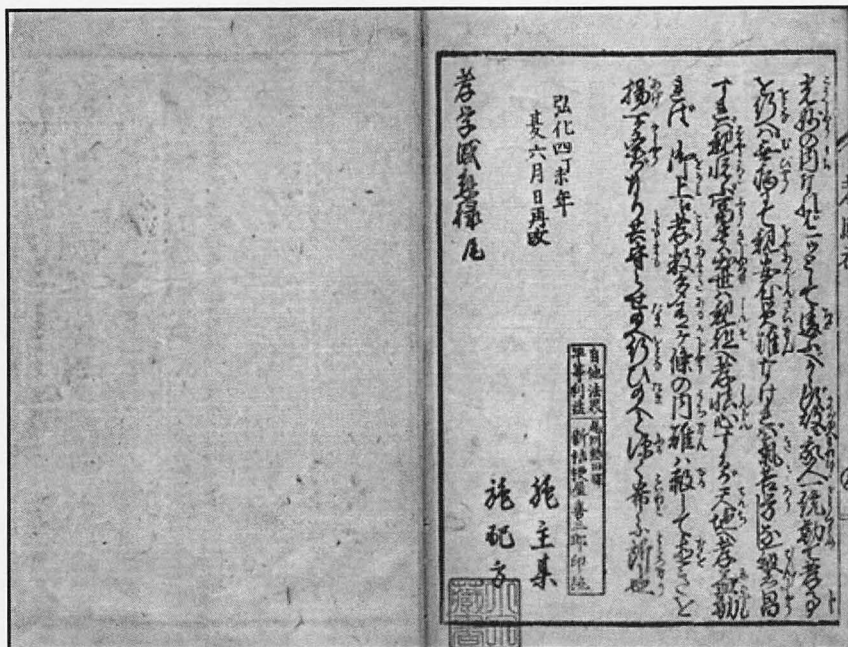


【3A】『孝学感養記 和合編』巻末

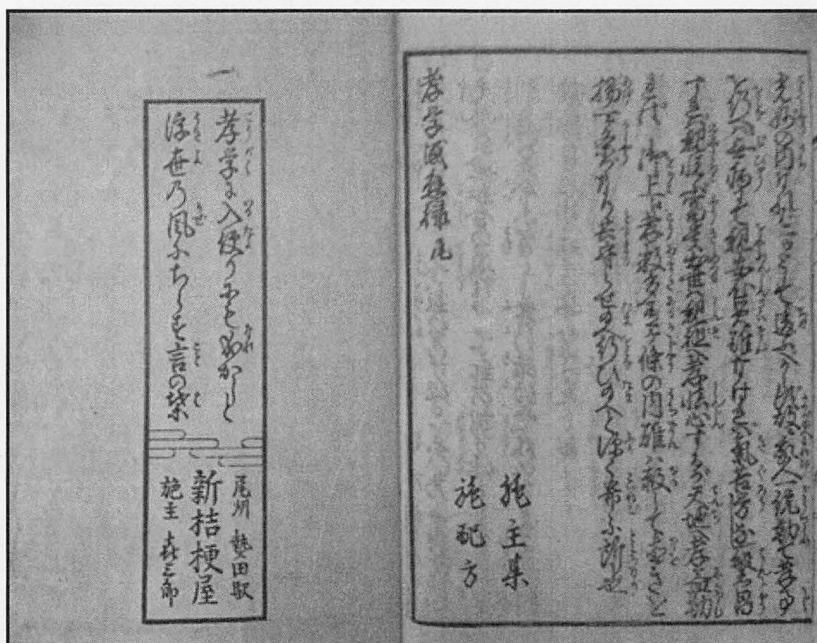


【3B】『孝学感養記 和合編』巻末





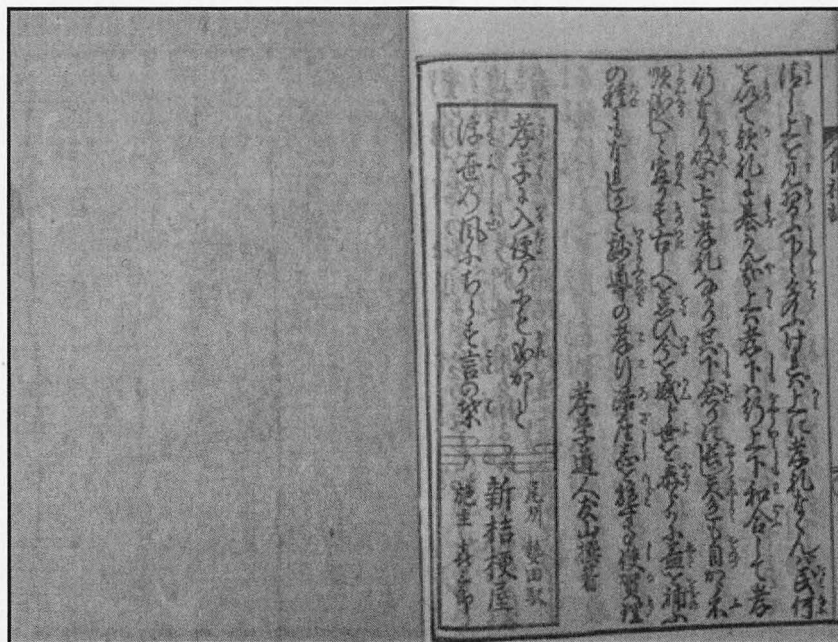
【3H】『孝学感養記 和合編』 卷末



【3L】『孝学感養記 和合編』 卷末

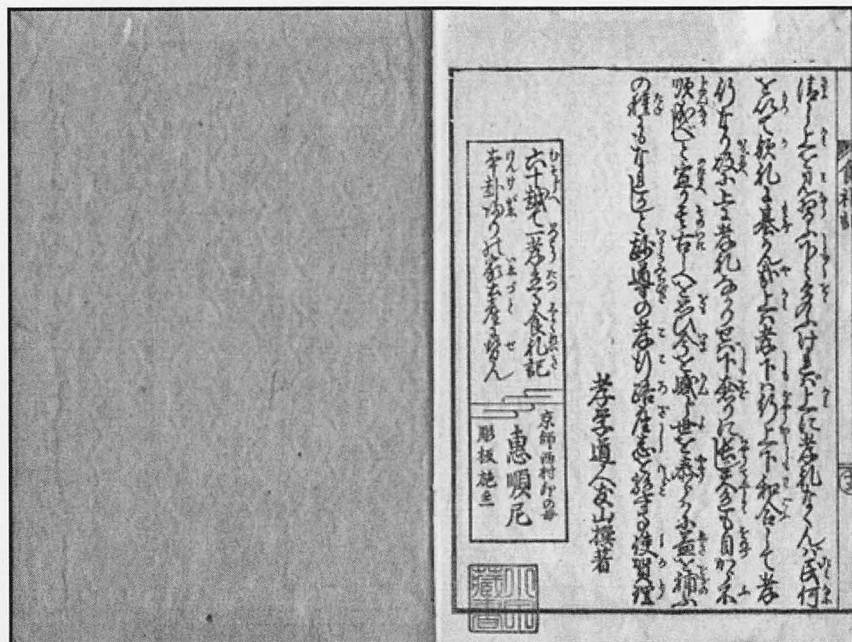


【3M】『孝学感養記 和合編』卷末

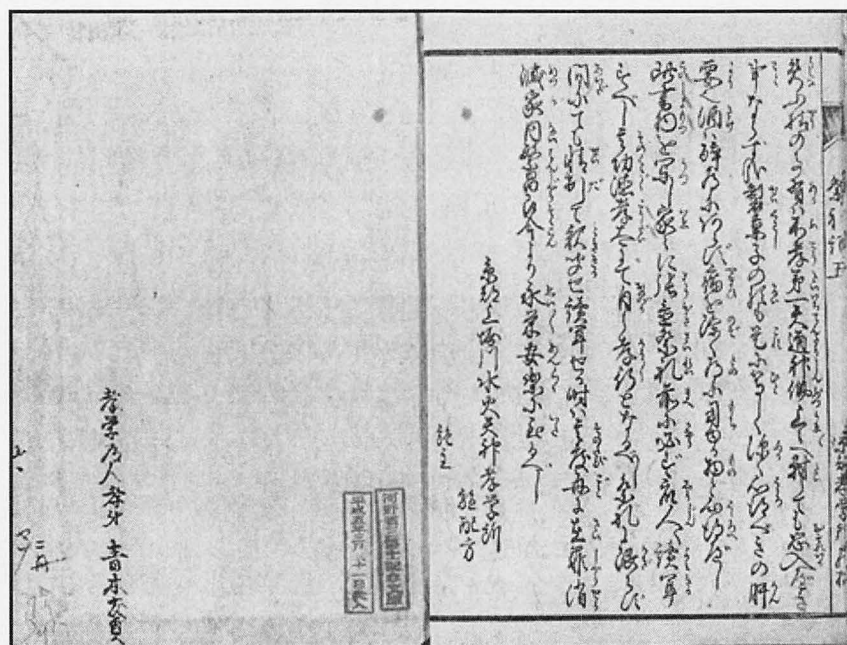


【4A】『孝学食礼記 和合編 全』卷末





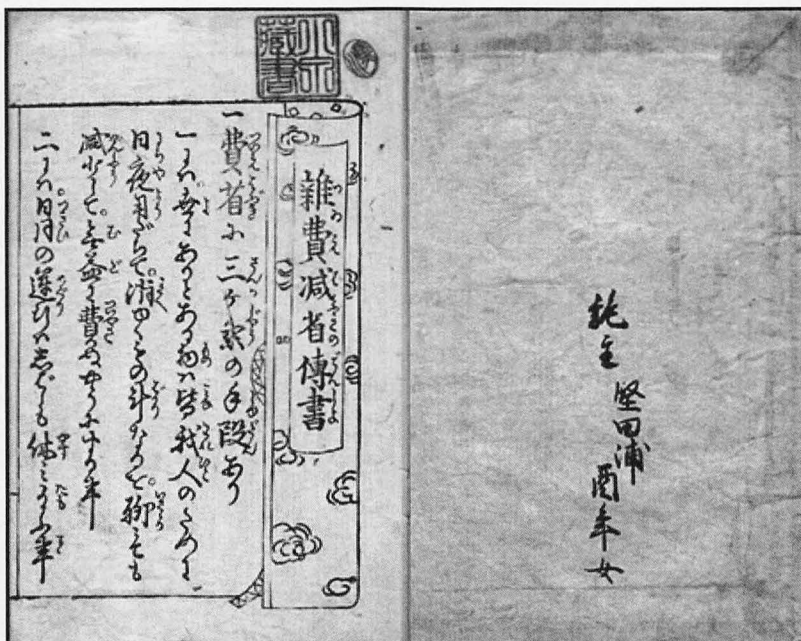
【4B】『孝学食礼記 和合編 全』巻末



【5A】『孝学祭礼記』巻末

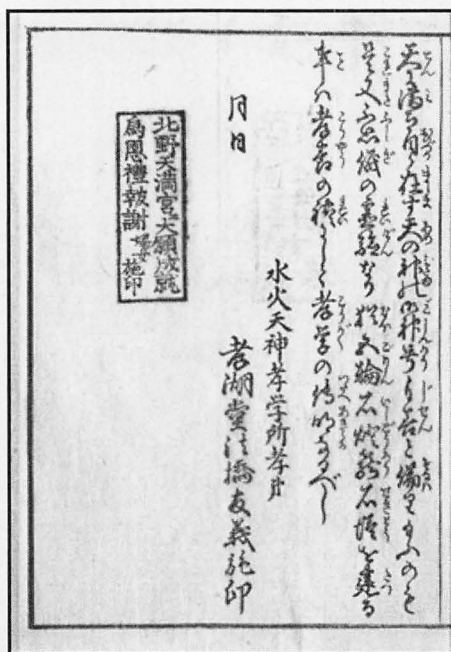


【6A】『孝学食慎録 和合編』巻末

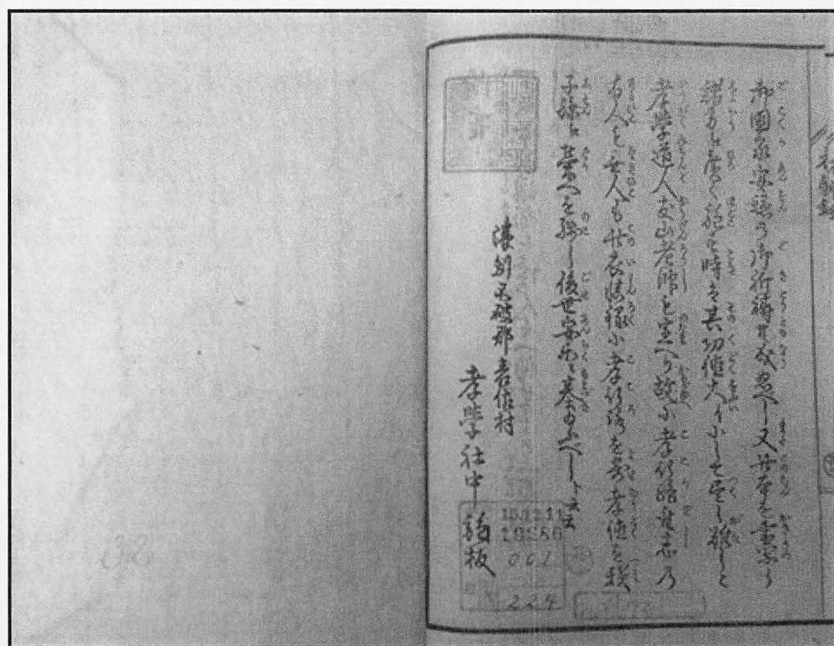


【8A】『費八分記 完』見返し





【10】『〈水火和合〉灯明記』卷末



【11】『孝学衣慎録 和合編』卷末

【13】『いゝは歌孝行鏡』

[illegible]

【12】『孝經』

187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525  
 526  
 527  
 528  
 529  
 530  
 531  
 532  
 533  
 534  
 535  
 536  
 537  
 538  
 539  
 540  
 541  
 542  
 543  
 544  
 545  
 546  
 547  
 548  
 549  
 550  
 551  
 552  
 553  
 554  
 555  
 556  
 557  
 558  
 559  
 560  
 561  
 562  
 563  
 564  
 565  
 566  
 567  
 568  
 569  
 570  
 571  
 572  
 573  
 574  
 575  
 576  
 577  
 578  
 579  
 580  
 581  
 582  
 583  
 584  
 585  
 586  
 587  
 588  
 589  
 590  
 591  
 592  
 593  
 594  
 595  
 596  
 597  
 598  
 599  
 600  
 601  
 602  
 603  
 604  
 605  
 606  
 607  
 608  
 609  
 610  
 611  
 612  
 613  
 614  
 615  
 616  
 617  
 618  
 619  
 620  
 621  
 622  
 623  
 624  
 625  
 626  
 627  
 628  
 629  
 630  
 631  
 632  
 633  
 634  
 635  
 636  
 637  
 638  
 639  
 640  
 641  
 642  
 643  
 644  
 645  
 646  
 647  
 648  
 649  
 650  
 651  
 652  
 653  
 654  
 655  
 656  
 657  
 658  
 659  
 660  
 661  
 662  
 663  
 664  
 665  
 666  
 667  
 668  
 669  
 670  
 671  
 672  
 673  
 674  
 675  
 676  
 677  
 678  
 679  
 680  
 681  
 682  
 683  
 684  
 685  
 686  
 687  
 688  
 689  
 690  
 691  
 692  
 693  
 694  
 695  
 696  
 697  
 698





[14] 『孝学講釈』



[15] 『大聴利徳の最上』



【16】『孝行繁昌・孝心成就』



## 翻刻の部

### 凡例

- 一、底本に水火天満宮所蔵の版本を使つた。
- 一、旧字体は新字体に、異体字は通行字体に改めた。
- 一、箇条書きの「○」内の漢数字をアラビア数字に改めた。
- 一、適宜、句読点や中黒（・）を施したが、濁点は加えなかつた。
- 一、□記号は虫食い・破れを、「（）」記号は左側の振り仮名を表す。

### 【翻刻1】『孝養文』

孝養文初  
孝ハ諸道の要、善行の根元□□□孝立バ万善是仁従ふ。  
実仁孝ハ万善万行の爲 源能勤 行ふ時ハ天道神仏の  
本願仁叶、悪事・災難を避、無病延命・富貴繁昌・  
即今来世・栄花安樂に至るべし。  
君臣不和なれバ親の心不安

夫婦不和なれバ親の心不安  
兄弟不和なれバ親の心不安  
朋友不和なれバ親の心不安  
親族不和なれバ親の心不安  
業職不情なれバ親の心不安  
親の心安んずるを以て孝の行ひと次。親安すれバ天地  
安んじ、天地安んずれバ神仏の心に叶。親不在バ、我身直  
仁親の遺体なり。恨謗□□耻目を不請、病を厭ひて、  
身上□□、先祖の血流を明仁、孝名を後世に揚るハ  
孝養の至なり。故仁德行万通の根元□□孝の一結仁止  
まれり。十相重りて孝□□少の冠仁子を附て、孝  
と読字の信心ハ、其孝行路座志を歩仁附置 日々仁勤 行  
ふ時ハ、人相・家相・方位、悪日禍ひ変じて吉事トな  
り。孝徳天地に満る時ハ国民豊仁泰平なり。一切の書  
教 縮る所ハ孝道仁至より外道なく、未書教□不学  
トいへ共、孝信の基を守れバ、外の善事ハ枝葉□根強く  
感る。孝官ハ仁満、自ら在す。天の神ハ□信心の  
靈驗なり。

孝養文 尾

謹上

## 【翻刻2】『孝養文功德書』

孝養文 奉 拝 読功徳書初

① 孝ハ諸道の要、善行の根元、積徳の最上なり。故

天道神仏世界聖主、皆孝の一結に孝行路座志を込て、

徳精を納ふ、其孝明を界内界外に照耀し、世精を補

ふの孝養文なれば、孝の文拝読の功德ハ孝太無量し

て尽すべからず。

② 孝養文拝読の行を積バ、天地感応・神仏納受、人倫

「ひと」に對してハ賢愚雅俗に至ル迄明・感通し、

其徳精の至ル事速なり。

③ 孝養文拝読の行を積バ、惡念の出ル事なく、善心自

ら氣ざして、直実信心・基付、子孫永榮・後世安樂に至

ルなり。

④ 孝養文拝読の行を積バ、生涯食事事關ず、米穀豊

にして飢窮の愁を遁れ、金銀財宝に不自由せず、

⑤ 行住坐臥安心して世を渡ルなり。

孝養文拝読の行を積バ、水難・火難・風雨・雷震・

早魃・不順無失の難題、諸の惡事・災難を遁れ、

變化の類近寄事あたはず。魚鳥獸の惡虫の害を除

き、万穀豊・実乗なり。

⑥ 孝養文拝読の行を積バ、夫婦相生して善子を儲け、

家内中能衆人と和合して、職業も自ら繁昌する

なり。

⑦ 孝養文拝読の行を積バ、身にきつ・垢を受ず怪我過をせず、

諸の病を除（のぞき）け、無病延命して、諸人

より愛敬を受ルなり。

⑧ 孝養文拝読の行を積バ、不浄を被ひ穢を清メ、身心清

く淨かして、心勞苦難の悲ミなく、無量の悦び、

無量の樂ミ、無量の福ひ自來ルなり。

⑨ 孝養文拝読の行を積バ、縁談物事能調ひ、人相・家相

・方位、惡日災ひ變じて吉事トなる。惡魔外道も祟

りをなさず、天地三光の恵ミを得て神仏の加護を蒙

ルなり。

⑩ 孝養文拝読の行を積バ、運を増、富貴立身・基付、善

智恵を授り、能分別が出、万事附て世を明・暮す

なり。

⑪ 孝養文拝読の行を積バ、女人「おんなと」して不足

「かたハ」な子を産す、血の道産前産後の悩ミなく、安

く平産して、親子共ニ無事息才に成育なり。



孝養文奉拝功德書 大尾

- ⑫ 孝養文拝読の行を積バ、第一其国・其所・其家・其身の祈禱トなり。迷ひの者も自ら得達するなり。
- ⑬ 孝養文拝読の行を積バ、其徳光天に満、地を潤し、国を照し、家を補ひ、身に耀き、心明か、即今より来世迄の疑念の雲を祓ふなり。
- ⑭ 孝養文拝読の行を積バ、先祖江の奉徳親代代過去前世に受し諸恩報謝トなり。家の根継、身上の土台堅メ、永栄徳宝の種時なり。
- ⑮ 孝養文拝読の行ヲ積バ、罪障消滅・孝心成就、其孝精に誘て至善ト孝行の大道に勤ミ至ルベシ。猶先天地神仏江の恩礼報謝上々の忠義、先祖親々江の孝行となれば、勤メて怠る事なかるべしト畏美々々謹で奉為拝読畢。

【注】

(1) 施印の定義めいた記述として、以下のようなものがある。

「書籍・印刷物を印刷して施興するもの」(乙竹岩造『施印とポスター』東京文理科大学、一九三一、一頁)・「或る目的のもとに、或る冊子を印刷して、一般の希望者又は特定の人々に、無料頒布する物」(井上和雄『施本考』『書物展望』第七巻十号、一九七三、十頁・同著『書物三見』書物展望社、一九三九、にも所収)・「施しのために配る刷りもの」(増田太次郎『引札絵ビラ風俗史』青蛙房、一九八一、二〇〇頁)・「倫理的徳目や道歌、その意を明示する絵入りの一枚の刷り物で、道話の聴衆に配付し家庭内のどこかに貼り、常に心の注意を喚起させるという教育効果を目的としたものである」(三宅守常『石門心学と道歌』大倉精神文化研究所編『近世の精神生活』横浜・大倉精神文化研究所、一九九五、一三〇頁)・「主として民間教導を目的として冊子を印刷し、無料で頒布するもの」(中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店、一九九五、五七頁)・「心学者が発行したおおむね一枚刷りの印刷物のことである」(高野秀晴『石門心学の「メディア戦略」』辻本雅史・沖田行司編『教育社会史』山川出版社、二〇〇二、一六七頁)・「篤志の個人、寺社、あるいは機関や結社が出版費用を出資して作製し、

- 希望者または特定の人間に無料配布した書籍や摺り物」  
(鈴木俊幸「施本」『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九、三四一頁)。
- (2) 前掲『施印とポスター』。
- (3) 前掲「施本考」新田信寛「石津屋施本」「六論演義大意」『東北大学院大学論集 一般教育』第三五・三六合併号、一九五九・同「菊田屋施本「善悪種蒔鏡」」『東北大学院大学論集 一般教育』第三八号、一九六一・「金生堂施本「和語陰陽録」について」『東北大学院大学論集 一般教育』第四一号、一九六二。
- (4) 池上英子『美と礼節の絆―日本における交際文化の政治的起源』(NTT出版、二〇〇五)・横田冬彦「近世の出版文化と(日本)」『ナショナルヒストリーを学び捨てる』(東京大学出版会、二〇〇六年)など。
- (5) Van Steenpaal, Niels. \* Taming the Fire Horse: The Free Distribution of Anti-superstition Pamphlets in Early Modern Japan. \* East Asian Publishing and Society, 5:2, 2015.
- (6) ファンステーンパール、ニールス『《孝学社中》実明記―近世後期京都における「孝学所」の社中記』『近世京都』第三号、二〇一九。(校正中)
- (7) ファンステーンパール、ニールス『孝連人物考 和合編』―美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動』『教育史フォーラム』第十三号、二〇一八、五六頁。
- (8) 『実明記』の全文翻刻は、前掲「『孝学社中』実明記」―近世後期京都における「孝学所」の社中記」に掲載されるが、現在校正中で頁番号が確定していないため、本稿における本資料への引用は原文の丁をもつて表す。
- (9) 「社会教育者としての孝学友山(四)」『朝日新聞 京都附録』大正五(一九一六)年八月七日。
- (10) 「社会教育者としての孝学友山(二)」『朝日新聞 京都附録』大正五(一九一六)年七月二八日。また、「伏見孝积所」という名称は、『実明記』(五丁才)による。
- (11) 安政五年の発行年が見えるのは『孝学衣慎録 和合編』である。
- (12) 友山の長男友伯と、二男友明も孝道普及活動に携わった形跡はあるが、「孝学所」という組織名のもとで、かつ安政年間以降に行われたことを裏付ける証拠は未だない(友伯については【14】「孝学講釈」を、友明については『朝日新聞 京都附録』(大正六(一九一七)年十月十七日)を参照)。また、友明の三男友彦(一八六九―一九四七)を理事長に、大正十四(一九二五)年十月二十五日に、「孝学堂協賛会」が設置されたことも附言しておく。京都を主な地域に、凡そ一千五百余名の会員を



率いて、「去今一百有余年以前文化文政ノ頃孝学友山ナルモノ孝道普及ノ目的ヲ以テ孝学堂ナルモノヲ興シタルソノ唱導ヲ継承シテ」、協賛会は講演会や、孝道雑誌『わすれまい』発行、孝子節婦の表彰を事業内容とした(古谷敬二編『全国教化団体名鑑』中央教化団体連合会、一九二九年、四五六頁)。

(13) 「孝学所施配惣締方」という表現は『孝掟』の末尾にある。

(14) 似た記述は『実明記』(三丁才)にもあるが、長文なためここでは省略する。

(15) また、『32』は京都女子大学図書館の複写禁止規定により、残念ながらここで図画で表示できないが、その見返しにある施印マークは【2A】【2C】と異なり、見返しの真ん中に記されている。

(16) この「施主某」という施印マークはもとより版本自体にあるので、『3』の全ての版にある。ただ、『32』はほかの版と違い、別に押されている施印マークがないため、ここで「施主某」を施印マークとする。こうした実態もあるため、施印マークを分析するにあたって、今後、マークの筆記メディアすなわち直筆・押印・刻版の差にも配慮する必要があるが、本稿においては省略した。

(17) 前者二つの引用は『孝連ヶ条』天保七年版にあり、後者

是天保九年版にある(前掲『孝連人物考 和合編』—美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動』五七頁、図Ⅲ・Ⅳ)。

(18) 『朝日新聞 京都附録』(大正五(一九一六)年七月二十八日)には、「伏見二十一組は十二に区画されて、一区画宛片ツ端から孝学の洗礼を受けさせる事になった。一度その聴講に列した者は誰しも姓名をその控帳に自署せねばなりません。この自署といふ事に良心の灯は輝きます。祖口(先か)の名を汚すとか親に粗末をするとかいふ場合何時も孝学所に自署した手が自からに戦なくと謠はれたものでした」とあるので、孝席に出席する際にも、姓名を記すことが求められたようである。しかし、この孝席は一般公開されたようなので、その視聴者は必ずしも会員である限りはない。『実明記』の記述では、「孝の本」へ姓名を公表する者は、すでに「社中へ連」つている者であることが前提となっているので、「孝の本」は「控帳」と考えにくい。よって、現時点で筆者は「孝の本」を孝学所が出版した施印と理解する。

(19) 河瀬友山の他の書物にも「名利・名聞」の否定が見られる。『水火和合』灯明記』には、「抑神仏へ灯明を捧たてまつる事ハ孝学の礼にて名利・名聞にあるべからず」と、『三野人物考 和合編』(一八三五年序)に「其孝名

を書集る人物考の名録は、名利・名聞を好む人物にあらず、代々の血流を明に、孝名を後世に残すは先祖への孝礼なり」と、『孝連人物考 和合編』（一八三七年序）に「孝学に心を寄て言散したる言の葉ハ、賢愚雅俗の趣向を不撰、有の俛に書集て一所二連、人物考と題して、後世に伝る事、先祖・子孫えの孝養にして、人々の名利・名聞にあらず」とある。

#### 【附記】

本稿は、二〇一八年度科学研究費補助金「近世教育メディア史における「無料」の価値―「施印」に着目して」（若手研究B、17K12981）による成果の一部である。また、本稿の執筆にあたって、史料の閲覧と撮影を快くご許可くださった孝学家の方々にお礼を申し上げます。